

### Ⅲ 猛禽類の生態

# 1 里山から低山に生息する猛禽類の生態

里山から低山にかけての地域は、平地や山地と比較して、多くの猛禽類が生息する地域であり、オオタカ、ツミ、ハイタカ、サシバ、ハチクマ、ノスリ、チョウゲンボウ、トビなどが生息する。この地域は、樹林、水田や畑地、草原、河川、湖沼などの様々な環境が組み合わされており、樹林が中心で草原や岩場が少し混じる山地や、開けた環境が中心となる平地と比べると多様な環境である。このような多様な環境には、それぞれに適応した猛禽類がいるので、里山や低山には多くの種類の猛禽類が生息するのである。多様な環境には、昆虫、哺乳類、鳥類、両生類、は虫類など多様な生物が生息している。さらに、昆虫を食べる種、哺乳類を食べる種といったように、食物とする生物が異なることにより、多くの種の猛禽類が生息することができるのである。

たとえば、長野県安曇野地域の調査では、養魚池が集中する平地部にトビが、草地のある場所にチョウゲンボウが、山と平地の境界にオオタカが、やや山に入った場所にノスリとハチクマが営巣し、さらに奥山ではクマタカが営巣するというように、地形的要素により各種猛禽類はすみわけをしていることが明らかに

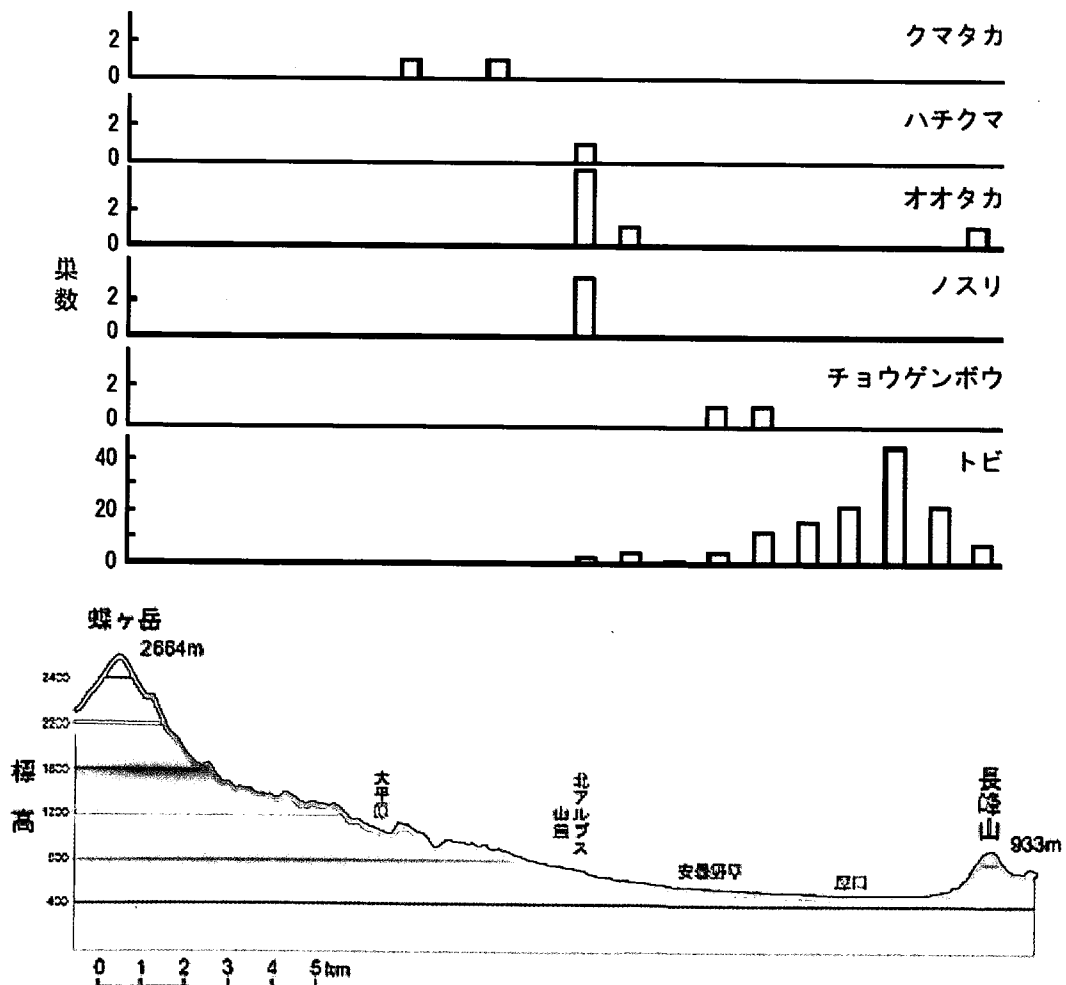


図1. 長野県安曇野地域での各種猛禽類の分布状況

なった(図1). また, 各種猛禽類が巣に運んできた食物の調査により、オオタカは主に中型の鳥類, サシバは両生類, ハチクマはハチ類などの昆虫, ノスリは小型哺乳類, チョウゲンボウは鳥類と小型哺乳類, トビは魚類を主に食べており, 食物も種により異なっていることが明らかになった(図2).

このように生息環境と食物が種によって異なっているので, 里山から低山にかけては多くの種の猛禽類が生息できるのである.

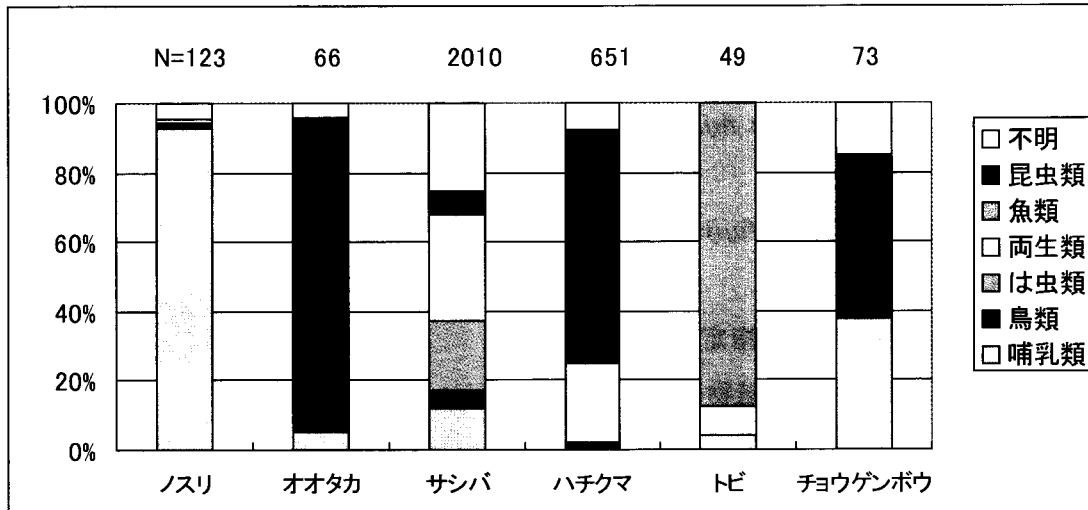


図2. 長野調査地で各種猛禽類が巣に運んできた食物.

## 2 猛禽類各種の生態

### オオタカ

*Accipiter gentiles*

全長 雄47.0～52.5cm<sup>1</sup>

雌53.5～59.0cm<sup>1</sup>

翼開長 雄約106cm～雌約131cm<sup>1</sup>



日本で繁殖するオオタカは *A.g. fujiyamae*<sup>2</sup>

絶滅危惧II類(亜種指定: *A.g. fujiyamae*)

:環境省 レッドデータブック

国内希少野生動植物種(亜種指定: *A.g. fujiyamae*):絶滅の恐れのある野生動植物の種の保存に関する法律

日口渡り鳥条約該当種(種指定)



### 形態

カラスくらいの大きさの森林性のタカ。成鳥は背および頭部が青みがかった黒で、胸から腹にかけては白く細い横斑がある。横斑は細いので遠くからみると白く見える。目(虹彩)は通常黄色く、赤みがかった個体もいる。尾羽の下側の羽が白く長いので、それが巻き上がって、飛翔時には腰が白く見えることが多い。幼鳥は背から頭にかけて茶色く、胸から腹にかけては、茶色がかった白で、縦斑がある。

### 鳴き声

巣などのそばに近づくと「ケッケッケッケケツケツ」とか「キヤツキヤツキヤツキヤツ」と聞こえる声を出して警戒しながら飛ぶことが多い。ヒナは「ピーピー」とか「ヒーヒー」と聞こえる声で食物を求めるが、大きくなると「ピェーピェーピェー」とか「ケアーケアーケアー」と聞こえる声で鳴く。雌が食物を求める時にも同様の声で鳴く。巣立ち直前や直後の雛は、この声で鳴きつづけていることが多い。これらの声は数百m先からも聞き取れる大きな声なので、営巣場所の特定に役立つ。

### 分布

ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の北部に広く分布する<sup>1</sup>。日本では九州から北海道までの地域で繁殖

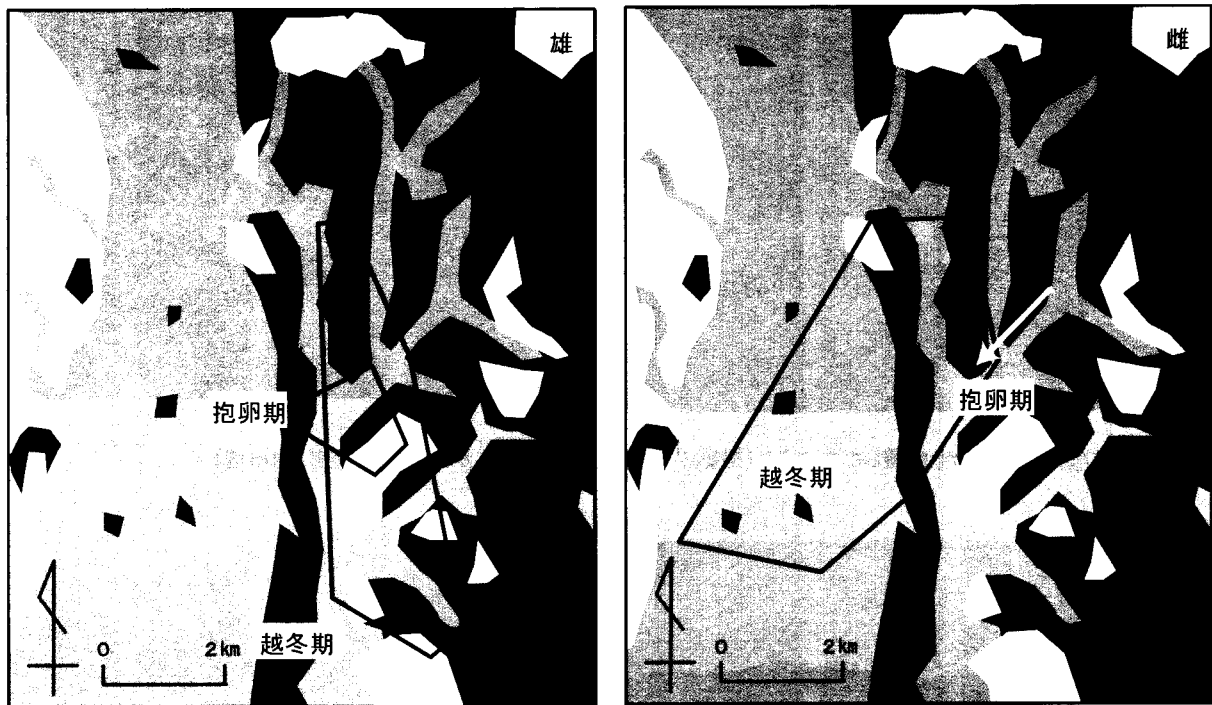


図3. 栃木調査地の雄(左)と雌(右)の繁殖期(抱卵期)と越冬期の行動圏の変化. 矢印の位置が巣のある場所. 雄雌ともに越冬期は行動圏が広がるものの, 雌の方がその度合いが大きく, 雄は越冬期も巣を中心に行動していることが多い. 雌は抱卵期はほとんど巣を離れない. 雌は越冬期には水田や畑などより開けた環境を利用するようになった. 赤枠が行動圏, 植生図の緑色は樹林, 黄色は畑, 水色が水田を示す.

表1. オオタカの一年

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
求愛・造巢期			抱卵期		巢内育雛期		巢外育雛期		非繁殖期		

しているが, 九州・四国・中国地方では少ない<sup>3</sup>. また, 里山から低山帯にかけての地域の繁殖個体数は多いが, 山地帯は個体数が少ないと考えられている<sup>4</sup>. 関東の丘陵, 農耕地帯の栃木県宇都宮近郊の調査地では100km<sup>2</sup>あたり9.1巣, 低山帯の栃木県鹿沼近郊の調査地では6.9巣, 中部地方の山間の盆地である長野県安曇野の調査地では3.3巣, 飯綱山麓の調査地では0.8巣と地域, 環境によって生息密度が異なっていた(図4).

日本で繁殖しているオオタカは主に留鳥として一年中同じ地域で生息しているが, 北方のものは冬期に南方へ渡るものも多い<sup>1</sup>. そのため, 冬期の南方の生息地では, その場所で繁殖している個体と北方から渡ってきた個体の両方が生息していることになる.

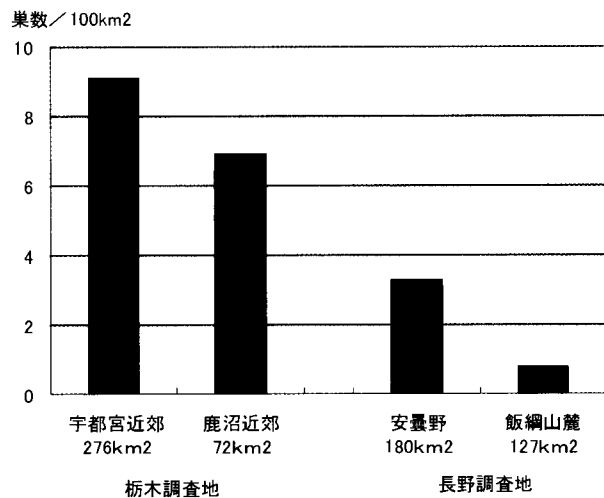


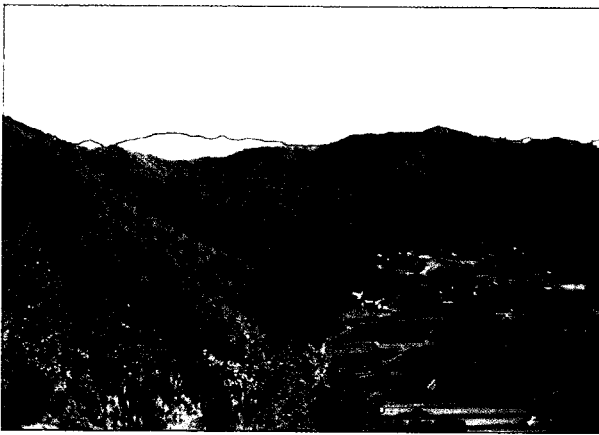
図4. オオタカの生息密度の地域による違い. 環境や地理的な違いにより生息密度は大きく異なる. 横軸の各調査地の数字は, 調査地の面積である.



冬期に開けた場所で獲物を捕獲したオオタカ(撮影:内田博)



オオタカの巣と雛(撮影:内田博)



オオタカが営巣している低山帯の環境(撮影:内田博)

### 一年の生活史(表1)

オオタカは、早いものでは1月くらいから産卵まで、帆翔と波状飛行と急降下などを組み合わせるディスプレイフライトを行なう<sup>5</sup>。また、雄と雌が並んで飛びながら営巣林に入ることも多い。

4月から5月に1~4卵を産卵する<sup>5</sup>。2~3卵の場合が多い。40日程度の抱卵の後、5月中旬から6月上旬に雛がふ化し、6月下旬から7月上旬に雛は巣立つ<sup>5</sup>。静岡では6月中旬から7月上旬に巣立つものが多く、埼玉では6月下旬から7月上旬、北海道では7月上旬から中旬と地域によって繁殖時期には違いがあり、地域の中でも1か月程度繁殖期がずれることもある<sup>4</sup>。

図3に示すように、栃木調査地のオオタカでは、雄は繁殖終了後も巣を中心として生活していたが行動圏は広がった。雌は繁殖期は巣のそばに滞在して抱卵・抱雛、給餌などを行っているために行動圏が狭かったが、非繁殖期は雄より広い範囲で活動するようになった。他地域でも同様の傾向が見られるようである。

繁殖地を離れて越冬する個体もあり、そのような個体は農耕地や河川敷、湖沼などの開けた環境で採食することも多く、都心の公園などでも見られるようになる。この時期は低山帯から、海岸沿いまで、さまざまな環境を利用している。

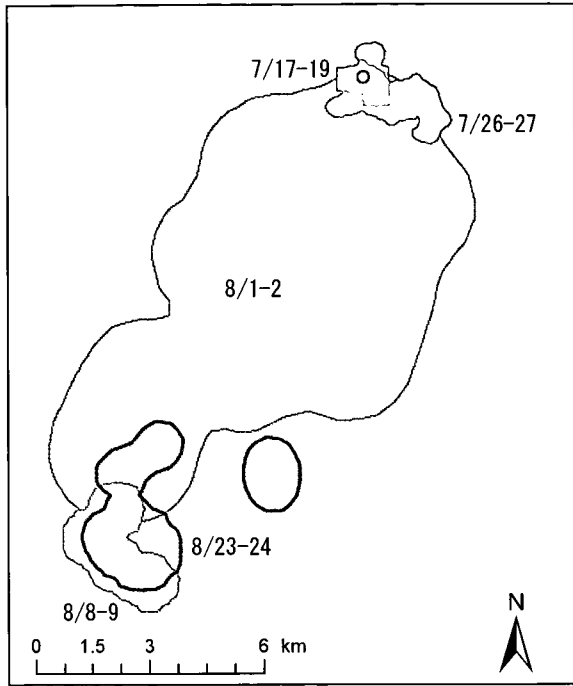


図5. 栃木調査地のオオタカの巣立ち雛の行動圏の変化。巣立ち後しばらくは、巣のそばに滞在していたが、徐々に行動圏を広げ、その後に離れた場所に定着する様子がわかる。



スギに作られたオオタカの巣 (撮影: 植田陸之)

### 巣立った雛の分散

巣立ち雛は、栃木の調査では、しばらくのあいだは巣の周りに滞在し、親の給餌をうけて生活していた。しばらくすると、自分で狩りをするようにはなったが、巣立ち後30~40日くらいまでは巣のそばに滞在していた。その後、徐々に行動圏を広げながら、他地域へと移動して行った(図5)。

### 営巣環境

標高500m以下の平地から低山帯にかけての樹林が主な営巣地となっているが、1500m以上の山地帯でも繁殖している<sup>4</sup>。平地から低山帯が主要な営巣地になっているために、人間の開発活動とオオタカの営巣地がぶつかることが多くなっている。

針葉樹林や針広混交林が営巣林となっていることが多く、巣はアカマツやスギ、モミなどの針葉樹にかけ

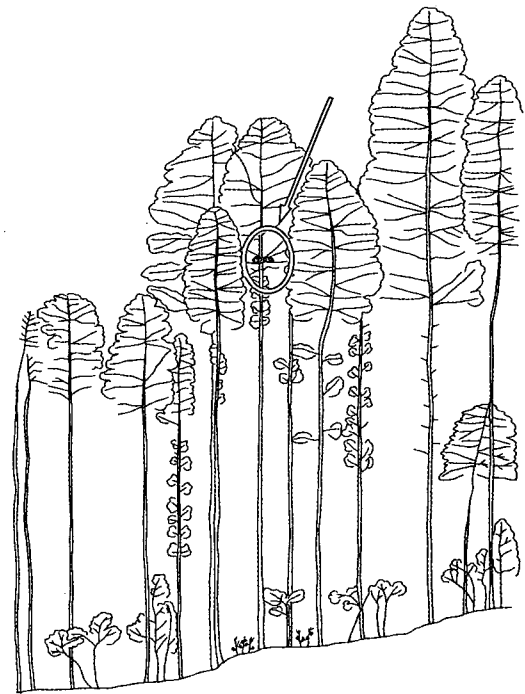


図6. 栃木調査地のオオタカの営巣林の模式図。亜高木層がすけた見通しのよい林であることが多い。

表2. オオタカが営巣した樹種と大きさ

樹種	樹高 (m)	胸高直径 (cm)	巣高 (m)	営巣林タイプ
栃木調査地				
スギ	30.0	40.9	23.0	スギ植林
スギ	29.0	46.4	21.0	スギ植林
スギ	19.0	29.4	15.0	スギ植林
スギ	25.0	42.0	15.0	スギ植林
スギ	19.0	42.7	12.0	スギ・ヒノキ植林
スギ	23.5	26.8	17.0	スギ・ヒノキ植林
スギ	21.0	39.7	14.0	スギ・ヒノキ植林
サワラ	24.0	45.0	20.0	スギ・ヒノキ・サワラ植林
スギ	24.5	45.3	15.0	スギ・ヒノキ植林
モミ	27.0	66.0	20.0	モミ群落
スギ	25.0	31.4	18.0	スギ・ヒノキ植林
スギ	17.0	62.0	12.0	スギ・ヒノキ植林
スギ	26.0	36.1	19.0	スギ植林
スギ	25.5	44.6	19.5	スギ・ヒノキ植林
アカマツ	16.5	29.3	11.3	アカマツ群落
アカマツ	14.5	18.0	10.8	アカマツ群落
スギ	30.0	44.5	18.0	スギ植林
スギ	35.0	65.2	22.0	スギ植林
スギ	33.0	61.0	18.0	スギ植林
スギ	32.0	45.0		スギ・ヒノキ植林
アカマツ	18.0	48.6		若齢広葉樹林
スギ	30.0	63.7		スギ・ヒノキ植林
スギ	25.0	39.4	18.5	スギ植林
長野調査地				
アカマツ	23.0	30.0	19.0	
ウラジロモミ	26.0	47.0	18.0	
アカマツ	24.0	38.0	19.0	
アカマツ	24.0	37.0	18.0	
アカマツ	27.5	35.0	21.5	
アカマツ	23.0	44.0	16.0	
アカマツ	21.0	35.0	17.5	
アカマツ	29.5	30.0	25.5	

られることが多い<sup>1</sup>。栃木調査地ではスギが多く、長野調査地ではアカマツが多いというように地域による差も見られた(表2)。

林内の構造は、オオタカは林内をよく飛翔するため、亜高木層(森林を高さ方向にみた場合の中間層)に葉のない開けた飛びやすい林が営巣林として好まれていた(図6)。

地形的には、山地の場合は谷に沿った場所につくられることが多く、特に谷のあまり奥まった場所でない標高的にも低い位置につくられることが多い。

巣は営巣林内でも最大級の木につくられることが多く、地上から7~20m位の位置の太い枝の基部に架巣される<sup>4</sup>。栃木や長野の調査地での巣は直径70cm以上、厚さは30cm以上であった。巣は毎年補修されながら継続使用されることが多く、その場合は巣の厚さが1mを超えるようなものもある<sup>1</sup>。ただ、必ず同じ巣を使い続けるわけではなく、巣を移動することもしばしばある<sup>4</sup>。

### 採食環境

栃木や長野の調査地では、採食地は樹林と畑や水田、草地などとの境界であることが多かった(図7)。樹林にとまって畑などの開けた場所や林内にいる鳥や哺乳類を捕獲することも多い<sup>1</sup>。



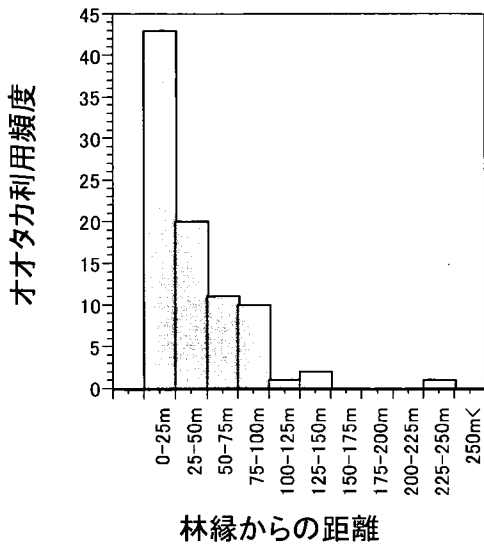


図7. 栃木調査地のオオタカの利用した場所の林縁からの距離(樹林の内外両側). 林縁部を主に利用しているのがわかる

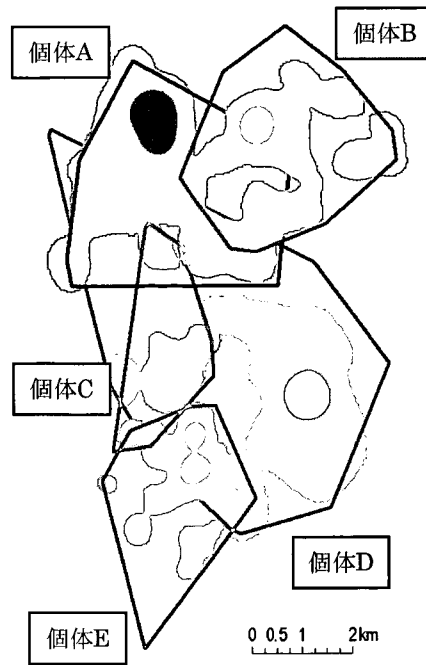


図8. 栃木調査地のオオタカ雄成鳥の繁殖期の行動圏. それぞれの色が個体を示し, 線で囲われた部分が行動圏の最外郭, 薄く塗られた場所が通常使う行動圏(95%行動圏), 濃く塗られた場所が良く使う場所(50%行動圏). 通常使う行動圏は周辺部において多少重複するものの, 基本的には排他的な行動圏を設けていることがわかる.

非繁殖期には水田地帯や河川や湖沼などの開けた場所を利用する個体もいる<sup>1</sup>. たとえば明治神宮や新宿御苑など都会の公園などでも見られるようになる.

### 行動圏と巣間距離

行動圏はその場所の環境によって異なり, 食物の多い場所では小さく, 少ない場所では大きくなる. 関東地方の場合は, 大まかに, 巣を中心に2km程度の範囲が行動圏になっていることが多いといわれている. 栃木調査地では図8に示すように, 行動圏の端部において他の個体の行動圏と重複したが, 利用頻度の高い場所では重複しない排他的な行動圏だった. そのため, 栃木調査地のようなオオタカが高密度で分布しているような地域では, 巣間距離は2~4km程度で等間隔になっていた(図9).

オオタカは採食場所として, 樹林と草地が接した場所をよく使うので, 栃木調査地と長野調査地のオオタカは, 樹林と草地がそれぞれ半分を占めるような場所に行動圏をかまえていた(図10).

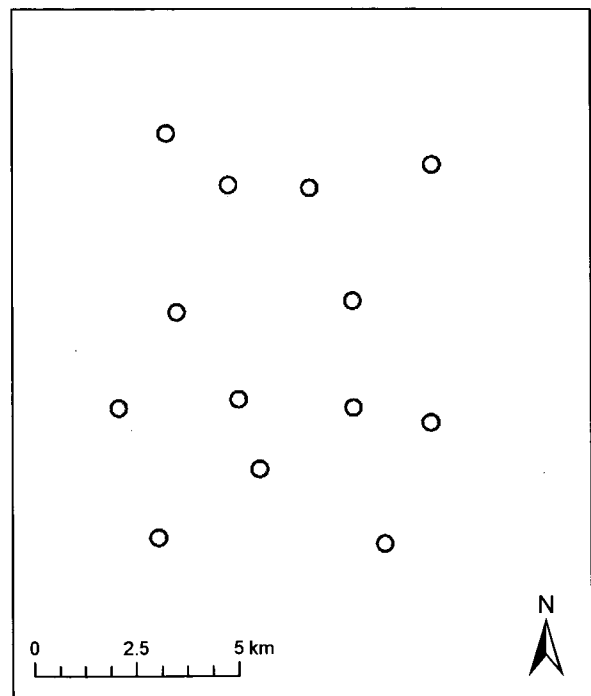


図9. 栃木調査地のオオタカの巣の分布. オオタカの分布が高密度な地域では, ほぼ等間隔で巣が並んでいることが多い. その場合は2~4 km 程度の間隔で巣が並んでいる.

図 10. 栃木と長野調査地の各オオタカ雄の繁殖期の行動圏

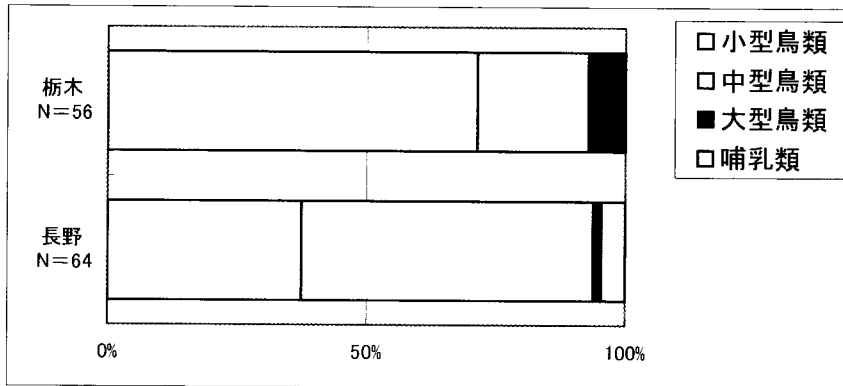
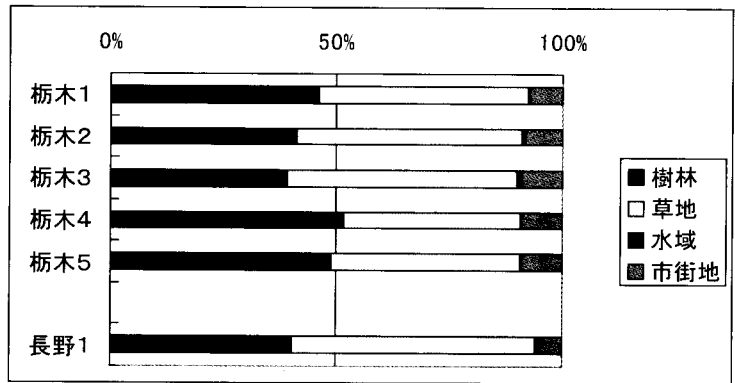


図 11. 栃木と長野調査地のオオタカが巣に運び込んだ食物.

## 食物

食物は鳥類と哺乳類で、特に鳥類が大部分を占める。繁殖期は雄が主に狩りを行なう<sup>1</sup>。雄は雌よりも身体が小さいので、巣に運ばれる食物はスズメ程度からハト程度までの大きさのものが多かった。ヒナが大きくなって抱雛する必要がなくなる繁殖期の後半と非繁殖期は雌も狩りを行なう。身体の大い雌はカラス類やキジ、ヤマドリ、カモ類などの大型の獲物も多くとる。哺乳類の獲物はリス類、ネズミ類、ノウサギ、キツネ・タヌキ・イヌ・ネコの幼獣などである<sup>6</sup>。

鳥類が主要な食物であることはどの地域でもかわらないが、鳥類のうちどのような種を捕食するかは、それぞれの場所で何が捕まえやすい獲物かで違ってくると思われる。たとえば、繁殖期にスズメなどの巣立ち雛がたくさんいるような地域では、簡単にとれる巣立ち雛をたくさん捕食するようで、水田地帯でスズメの巣立ち雛の群れがたくさんいた栃木調査地では、巣に運び込む小鳥の割合が非常に高かった(図 11)。

## 引用文献

1. 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男. 1995. 日本のワシタカ類. 文一総合出版, 東京.
2. 日本鳥類目録編集委員会. 2000. 日本鳥類目録改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広市.
3. 小坂正俊・新井真・遠藤孝一・西野一雄・植田睦之・金井裕. 1997. アンケート調査によるオオタカの分布状況. 平成8年度環境庁委託調査 希少野生生物生息状況調査. pp. 65-73. 日本野鳥の会, 東京.

4. 小坂正俊・新井真・遠藤孝一・西野一雄・植田睦之・金井裕. 1996. アンケート調査によるオオタカの分布と生態. 平成7年度環境庁委託調査 希少野生生物生息状況調査. pp. 53-74. 日本野鳥の会, 東京.
5. 環境庁自然保護局野生生物課. 1997. 猛禽類保護の進め方. 環境庁, 東京
6. 石沢慈鳥・千羽晋示. 1967. 日本産タカ類12種の食性. 山階鳥研報 5: 13-33.

## サシバ

*Butastur indicus*

全長 雄47cm<sup>1</sup>

雌51cm<sup>1</sup>

翼開長 102.5cm～115cm<sup>1</sup>



撮影:中村照男



撮影:内田博

### 形態

カラスくらいの大きさのタカ。成鳥は背および頭部が赤褐色で頬の部分は灰色っぽい。雄は胸の部分が赤褐色で、腹は白く線上に赤褐色の部分がある。雌は雄にくらべて胸から腹の部分が白っぽく眉の白い部分が顕著である。目(虹彩)は黄色く、くちばしの付け根、足も黄色い。若鳥は赤みがうすく、胸から腹にかけては、茶色がかった白で、縦線がある。目は褐色である。飛翔時は翼が細長く見え、翼が薄い感じで逆光時には透けて見える。

### 鳴き声

「ピックイー」と聞こえる声で頻繁に鳴く。巣などのそばに近づいたときに出す警戒声も同様な声である。ヒナは「ピーーピッピー」と鳴く。

### 分布

アムール地方南部、ウスリー地方、中国東北部から河北省まで、そして日本の東北地方から九州にかけての地域で繁殖し、南西諸島、台湾、中国南部、ミャンマー、インドシナ、マレー半島、フィリピン、ボルネオ、セレベスなどで越冬する<sup>1</sup>。

日本では主に丘陵地から低山帯にかけてが主な営巣地となっており、丘陵地の樹林帯に谷底平地の水田が入り込んだような樹林と水田が組み合わされた谷戸地形では繁殖例が多い<sup>2</sup>。また、樹林と草原が組み合わされた場所にも生息している。そのため、谷戸がまったくない長野県安曇野の調査地ではサシバは記録されず、少し谷戸がある長野県飯綱山麓の調査地では100 km<sup>2</sup>あたり18.1つがい、低山の谷戸状地形になっている栃木県鹿沼近郊の調査地では26.4つがい、谷戸が発達した丘陵を含む宇都宮近郊の調査地では46.4つがいと環境によって生

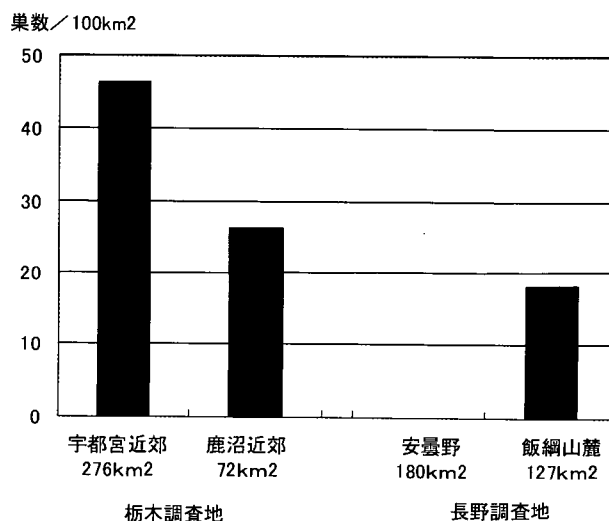


図 12. サシバの生息密度の地域による違い。環境や地理的な違いにより生息密度は大きく異なる。横軸の各調査地の数字は、調査地の面積である。



サシバの生息する谷戸田の風景(撮影:内田博)

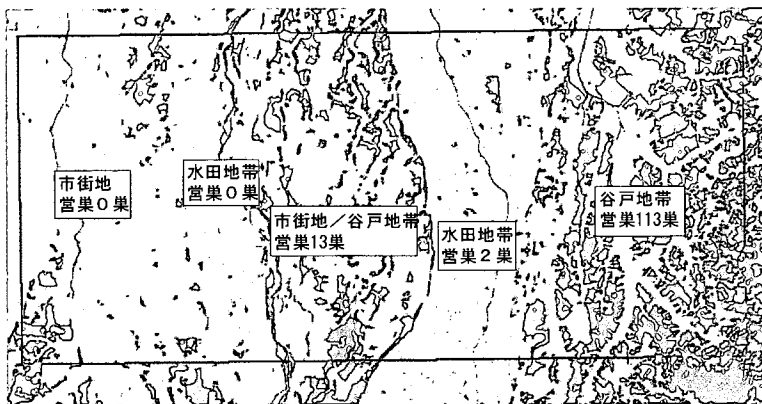


図 13. サシバの分布状況. 植生図は、灰色が市街地、黄色が水田、緑が樹林、うすい緑色が畑を示す. 水田と樹林が入り組んだ谷戸地形の場所にサシバが多く分布しているのがわかる

表3. サシバの一年

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
越冬地(東南アジア等)									越冬地(東南アジア等)		
			求愛・造巣期			抱卵期			巣内育雛期		
						巣外育雛期			非繁殖期		

息密度が大きく違っていた(図12). 特に宇都宮近郊調査地東部の谷戸の発達した丘陵のみでは、100k m<sup>2</sup>あたり143.0つがいと非常に高密度に生息していた(図13).

近年、谷戸の水田は機械化がしにくく農業効率が悪いため、宅地等に転換されたり、耕作放棄されたりしている<sup>3</sup>. サシバは谷戸環境に強く依存しているため、その環境の改変により急激に個体数が減少している.

### 一年の生活史(表3)

日本の多くの場所でサシバは夏鳥であり、南西諸島や東南アジアで越冬し、夏期に繁殖のために飛来する. 関東地方では、3月下旬から4月上旬に越冬地から渡来する<sup>1</sup>. 4月下旬から5月上旬に2~4卵を産卵し、5月下旬から6月上旬に雛がふ化し、7月上旬から中旬に巣立つ<sup>1</sup>.

サシバが日本から越冬地への渡りをはじめるのは9月下旬から10月上旬だが、栃木調査地では8月に入ると繁殖地でサシバを見ることは少なくなった. 採食場所をかえて目立たなくなるだけなのか、繁殖地を離れた他の地域で8月から10月までの1~2か月を過ごしているのかは不明である.



図 14. 栃木のサシバの営巣林の模式図

サシバの巣と雛(撮影:内田博)

表 4. サシバが営巣した樹木と営巣林の特性

栃木調査地				
樹種	樹高 (m)	胸高直径 (cm)	巣高 (m)	営巣林タイプ
アカマツ	19.0	28.4	11.0	ミズキ群落
アカマツ	15.0	38.8	11.0	アカマツ群落
スギ	15.0	24.7	11.0	ヒノキ植林
アカマツ	17.0	27.5	13.0	コナラークヌギ群落
アカマツ	12.0	28.4	8.0	アカマツ群落
アカマツ	17.5	30.5	13.5	コナラ群落
アカマツ	18.0	30.0	14.0	アカマツ群落
アカマツ	18.5	18.7	12.4	アカマツ群落
アカマツ	16.0	27.5	10.2	アカマツ群落
アカマツ	16.0	20.7	13.2	ヒノキ植林
スギ	15.4	17.9	13.6	スギ植林
アカマツ	16.5	29.4	12.2	アカマツ群落
アカマツ	13.6	35.8	11.2	コナラ群落

長野調査地		
樹種	林縁からの距離 (m)	営巣林面積 (km <sup>2</sup> )
スギ	20	7.2
カラマツ	15	3.2
カラマツ	20	3.2
カラマツ	50	連続した森林
カラマツ	20	連続した森林
カラマツ	30	連続した森林
アカマツ	40	15.6
スギ	50	6.6
カラマツ	60	連続した森林
カラマツ	25	36.4
カラマツ	25	34.1
カラマツ	35	34.1
アカマツ	30	3.3
カラマツ	5	6.2
カラマツ		30
カラマツ	5	0.9

### 営巣環境

営巣林は針葉樹林や針広混交林が多く、栃木や長野の調査地では、アカマツ、スギ、カラマツなど主に針葉樹に架巢していた(表4)。宇都宮近郊の調査地では、サシバは亜高木層(森林を高さ方向にみた場合の中間層)に葉のある林を営巣林としており(図14)、亜高木層に葉のない開けた林を営巣林としていたオオタカとは異なっていた。サシバがこのような林を好むのか、あるいは、谷戸の林縁を選ぶため

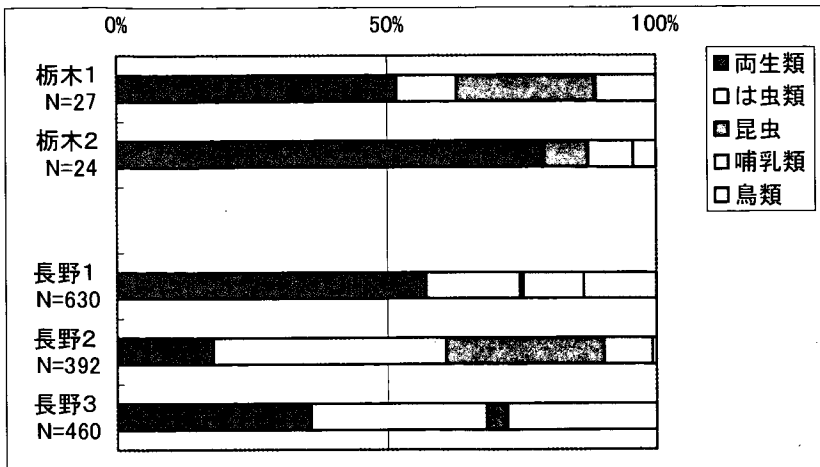


図 15. 栃木と長野の調査地でサシバが巣に搬入した食物. いずれの巣でも両生・は虫類が食物の大きな割合を占めている.

に、日が差し込みやすく、このような営巣林になるのか、それともオオタカとの競合で、このような林を営巣林としていたのかは、わからない。

巣がつくられる位置は、林の真ん中ではなく、主に林縁部で<sup>4</sup>、アカマツやスギ、ヒノキなどの針葉樹の樹高の2/3くらいの位置に架巢されることが多い。巣はくり返し利用されることが多い。大きさは直径30～40cm、厚さ20cm程度と、オオタカの巣と比べると小さく、カラス程度の大きさである。オオタカなど他種の高巣を利用することもある。

### 採食環境

水田や草原に面した樹林の林縁部の樹木や電柱などにとまって獲物を探していることが多い。春や初夏の草や稲があまり伸びていない時期は水田や畦にいる小動物を主に捕獲するが、草が伸びてくると獲物を捕獲しにくくなるので<sup>5</sup>、樹冠にいるアマガエルや昆虫などを捕獲することが多くなる。

### 行動圏

行動圏の広さは、100～200ha以上と環境によって大きく異なっている。行動圏は隣接する、つがいと大きく重なっていることが多く、その中心部分のみを他個体から排他的に防衛する。行動圏の面積は、大阪のサシバでは192haと112haだった<sup>6</sup>。

### 食物

食物は場所によって異なるが、栃木や長野の調査地では、夏期はカエルやトカゲなどの両生・は虫類が多く、ネズミなどの哺乳類や昆虫など地上や樹上にいる生物を主に捕食していた(図15)。鳥類も獲物となる。林縁部の見晴らしのきく木の先端や電柱などにとまって周囲の獲物を探し、急降下して捕食することが



水田で採食するサシバ(撮影:内田博)

多い<sup>1</sup>。冬期はバッタやカエルなど、夏期と同じく地上にいるものを捕食することが多い<sup>7</sup>。

#### 引用文献

1. 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男. 1995. 日本のワシタカ類. 文一総合出版, 東京.
2. 東淳樹. 1998. サシバが教えてくれる身のまわりの環境保全. 野鳥 (609): 10-13.
3. プロジェクト研究第5チーム. 1998. 棚田における耕作放棄後20年間の植生変化. 農業研究センターニュース (71): 6-7.
4. 小島幸彦. 1999. サシバの営巣環境の特性(英文). 日本鳥学会誌 48: 151-155.
5. 平野敏明・君島昌夫・小堀政一郎. 2004. 渡良瀬遊水地におけるサシバの採食環境と食性. *Strix* 22: 45-58.
6. 小島幸彦. 1982. サシバのテリトリーとテリトリー行動. 鳥 30: 117-147.
7. 久貝勝盛. 1988. サシバは越冬地で何をしているか. 野鳥 (506): 19.



## ハチクマ

*Pernis ptilorhyncus*

全長 雄57cm<sup>1</sup>

雌60.5cm<sup>1</sup>

翼開長 121cm～135cm<sup>1</sup>



### 形態

カラスよりずっと大きい大型のタカ。長くて幅の広い翼を持ち、飛翔時に翼の前縁から頭部が長く突き出して見えるのが特徴である。羽色は個体変異が大きく、一律にはいえないが、雄成鳥は顔が青みがかかった灰色で、目(虹彩)が暗褐色で、雌成鳥は目が黄色い。上に示した写真は成長の雄である。幼鳥はくちばしの付け根の蠟膜が黄色いのが目立ち、それが飛翔時でもよく目立つので、ここで成鳥か幼鳥かを識別することができる。また、尾羽の横帯は雄は2本の太い帯が目立ち、雌は細い帯である。

### 鳴き声

あまり鳴かない。まれに「ピーーヨ」とか「ピョッ」と聞こえる声で鳴く。

### 分布<sup>1</sup>

バイカル湖の西から中国東北部、朝鮮半島、日本にかけての地域に夏鳥として渡来し、繁殖する。日本では島嶼部の一部を除き全国的に分布していると考えられている。また、インドからマレー半島、ジャワ、ボルネオ、フィリピンにかけての地域では留鳥として分布しており、バイカルから日本にかけての地域で繁殖している個体も冬にはこれらの地域で越冬しているものと考えられている。

### 一年の生活史<sup>1</sup>

日本では夏鳥であり、越冬期は東南アジアで過ごす。サシバよりも遅い5月中下旬に渡来する。飛来してすぐの5月下旬から6月上旬に1～3卵を産卵する。2卵のことが多い。抱卵日数は30～35日で、6月下旬から7月上旬にふ化し、ふ化後35～45日程度の8月上中旬に巣立つ。9月に入ると、日本から飛去をはじめ。

表5. ハチクマの1年

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
越冬地(東南アジア等)						越冬地(東南アジア等)					
				求愛・造巣期 抱卵期		巣内育雛期		巣外育雛期・非繁殖期			



ハチクマの生息地の環境(撮影:内田博)

図 16. ハチクマが利用した場所の分布. 赤が 2001 年, 青が 2002 年に確認された位置を示す. 同じ程度の標高に沿って, 利用しているのがわかる.



ハチクマの巣 (撮影:内田博)

表 6. 長野調査地で繁殖したハチクマが営巣した樹種と大きさ

樹種	樹高 (m)	胸高直径 (cm)	巣高 (m)	大きさ (cm)
アカマツ	23.0	36.0	18.0	90×60×40
アカマツ	19.5	38.0	14.5	200×150×80

### 営巣環境

低山帯の林が主な営巣地となっている。北海道では平地の林にも生息している。主にアカマツ, カラマツ, ナラ類などの地上10~25mの位置に営巣する<sup>1</sup>。長野調査地の2巣はアカマツで, 巣は外径60~200cm, 厚さ40~80cm程度であった(表6)。

### 採食環境

長野の調査ではほとんど樹林内で行動し, 林内で採食していた。調査を行なった2個体のうち, 1個体(雄)はアカマツ林, もう1個体(雌)は落葉広葉樹林を選好していた。共に両調査地の優占する植生を選好していたので, 生息地の環境によって, 主に利用する環境が違っている可能性が考えられる。

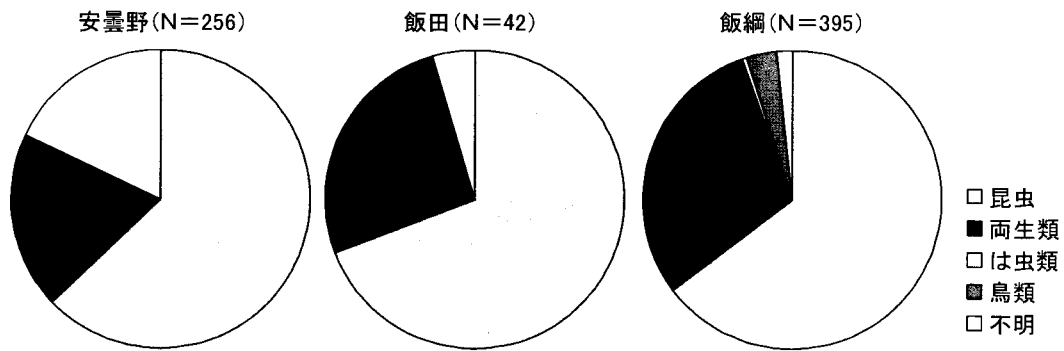


図17. 長野県の3地域でハチクマが巣に運んできた食物

### 行動圏

長野で調査を行なった2羽の行動圏の広さは、それぞれ、700haと2065haと個体によって大きく異なっていたが、低山帯の標高の低い部分に広がっているという点では一致していた。

### 食物

ヒナに給餌する食物は長野地域で調査を行なった3巣とも昆虫が多いことで一致していた(図17)。昆虫のほとんどはハチの子で、全体の60%以上を占めていた。それ以外にはカエル類が多く、全体の20～30%を占めていた。他地域でも同様の結果が得られている。おそらくハチの子を主食としているために、サシバなど同じく日本に渡来して繁殖する猛禽類に比べて日本への渡来時期が遅いと考えられる。

### 引用文献

1. 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男. 1995. 日本のワシタカ類. 文一総合出版, 東京.

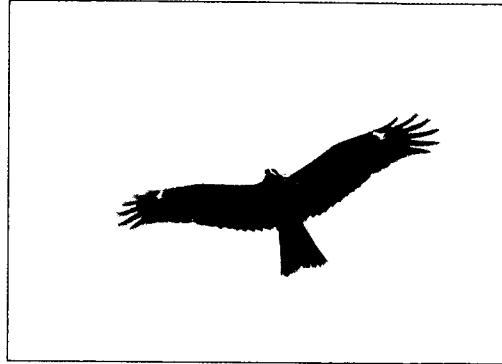
## トビ

*Milvus migrans*

全長 雄58.5cm<sup>1</sup>

雌68.5cm<sup>1</sup>

翼開長 157cm～162cm<sup>1</sup>



撮影:植松晃岳



撮影:内田博

### 形態

大型のタカ。全身茶褐色で雨覆いから背中にかけてやや淡褐色になっている。下面風切羽の付け根に白い斑がある。尾が凹尾になっているのが最大の特徴で、日本のほかの猛禽類には凹尾のものはいない。また、飛翔時は翼の前縁が山型になっているのも特徴である。

### 鳴き声

「ピーヨロロロ」と聞こえる声で頻繁に鳴く。食物を奪い合ったりする時には「キッ」という声をだす。

### 分布

極地と砂漠、島嶼の一部を除き全世界的に分布している。寒い地域などでは渡りをするものもいるが、一年中同じ地域にとどまるものが多い。日本では、南西諸島を除く全国に分布している。海岸や河川沿いなど水域のある場所に多い。

### 一年の生活史<sup>1</sup>

2月中旬頃から営巣地を中心に動くようになる。雄がやや上方から雌を追尾したり、2羽で帆翔したり、食物の奪い合いのように足を絡めあったりするディスプレイが見られるようになる。巣作りは3月中旬ごろまでには完了する。3月中旬から5月上旬に2～3卵を産卵する、まれに1卵や4～5卵、産卵することもある。抱卵日数は25～37日で、50日ほどで巣立つ(表7)。ふ化日にズレがあるので、遅くふ化したものは成長が遅く、巣立ちまで80日以上かかることもある。巣立ち後もさらに40～50日は親からの給餌をうけながら生活する。

### 営巣環境

水域に面した林で営巣することが多い。山地や丘陵の林のほか、防風林にも営巣する。本州中部以北

表7. トビの1年

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
非繁殖期		求愛・造巣期		抱卵期	巣内育雛期		巣外育雛期・非繁殖期				

表8. トビの営巣環境と営巣樹種

樹種	環境				
	神社	庭木	畑地わき	雑木林	カラマツ林 河畔林
常緑針葉樹					
スギ	6	10			
アカマツ	12	3	1		6
ヒノキ		5	1		
ウラジロモミ		1			
落葉針葉樹			3		3
落葉広葉樹					
ハリエンジュ					
ポプラ			7		6
ヤナギ類			5		6
ケヤキ	1	1			5
ソメイヨシノ			2		
エノキ			1		
ハンノキ					1
クリ		1			
樹種不明			1		



ではアカマツ、カラマツ、モミ、ツガといった針葉樹に営巣することが多く、クヌギやイチヨウなど広葉樹にも営巣するが、植生が異なる本州南部の地域ではシイ、カシ、タブなどの照葉樹に営巣することも多い<sup>1</sup>。巣は地上3.5mから14.4mまでの高さにわたる<sup>2</sup>。巣の外径は45～80cm、厚さは20～50cmで、何年も連続して使用されているものは非常に大きく、外径、厚さともに1mを超えるものもある<sup>1</sup>。巣材としてボロ布など人間の捨てたものを利用することがあるのも特徴である。

### 採食環境

農耕地や水域で採食することが多い。長野県安曇野では、養魚池の多い地域で繁殖するものが多く、養魚池の魚を主要な食物としていた。

### 行動圏

長野県安曇野の調査地では、農耕地などの開けた環境に接した林に営巣することが多かった。長野県他の地域では山麓の林の縁に沿って巣が分布することが多く見られる。巣を中心とした半径100から150mほどの範囲をなわばりとして防衛していた。しかし、食物は、なわばり外の開けた場所に出かけて捕ることが多く、河川や養魚場など食物の多い場所は、多数の個体の共同採食地となっていた。そのため、行動圏は広く、巣から数km以上離れた場所に採食にでかけていた。

### 食物

魚類や屍肉、生ごみなどを主に食べるが、ネズミ類

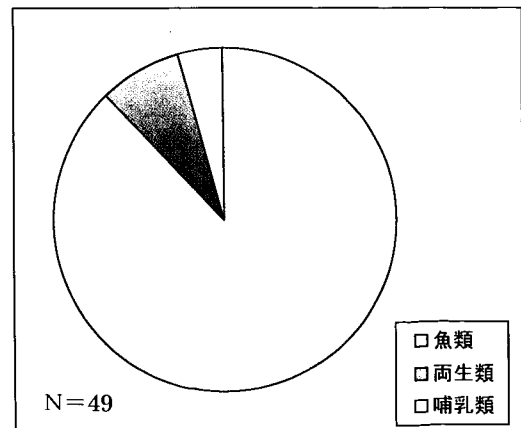


図18. 長野県安曇野でトビが巣に運んだ食物

や、弱った鳥類なども襲う<sup>1</sup>。長野県安曇野での調査では、養魚池の多い地域での調査であることもあり、巣にいる雛に運ばれた食物の90%は魚類だった(図18)。

#### 引用文献

1. 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男. 1995. 日本のワシタカ類. 文一総合出版, 東京.
2. 古賀公也・白石哲・内田照章. 1989. 長崎半島に生息するトビの繁殖生態. 日本鳥学誌 38: 57-66.